

ら艦砲も何もかもドンドン飛んで来る時でした」

「そこを出たら、アメリカの飛行機は低空です、非常に危かっただけです。でも仕方ないですから、阿檀葉の下に穴を掘っていいんです」

「それから、部落民はバラバラです。こっちから下って行くとも自然壕があるかないかは、はっきりわかっておっただけです。それでこっちを出たら、もうおしまいだと思っただけです。もうちょっとした丘の陰や、畑の畦くらいしかないということも思っただけです」

「部落の人は、みんな海岸へ行ったんですが、あちこちに散らばってました」

仲門 忠一 (三十一歳)

マヤー壕から出た後、わたしたちは、四か所の家族がいっしょに阿檀林の中の石の丘の下に住んでおっただけです。

そこで一か月くらい暮して、後四、五日、一週間くらいで、大休講和(第三十二軍の最高幹部の最後の意味らしかった)になった頃からは、水汲みに行ったらですね、自分らのいる海岸端から上里へ水汲みに行きおっただけです。約二千メートルくらいの距離ですが、自分らの隠れている阿檀林まで来る間に、一斗罐を二つづつ天秤棒で担いでいるんですが、途中で兵隊にかっぱらわれて、二斗の水がやっと両方で五升くらいにしかならなかったんです。その水汲みに行く時は、照明弾は上るし、直撃が一発来たら、前の方で四、

には、掃海艇の方からうんと直撃やるんですよ。日が暮れる時は掃海艇が近くに沢山来て、浮んでおるんです。それが終わって、炊事から食事から水汲みに、食糧取りに行くんです。

あそこにはいた時の中間頃でしたが、三名行ったんですがね、チョさんの兄さんと、わたしの叔父さんですが、三名で担いで来た時でしたが、自分等から三メートルくらいで爆発したんですよ、艦砲が。二人はですね、そのまま畑に畦に転んで水も捨てたわけですよ。わたしはまた、水はそのままおいて、そこにしゃがんでいたんです。それから三発来て、その後は来ないんですよ。それから二人はまた行くわけには行かないので、わたしの水を三名に分けて、三分くらいずつ分けて帰って来たんです。

最初から女の人も行くこともあったんですが、弾は来るんですよ。しかし弾に対しては、長い間の経験で、わかりますよ。南部にいた人は、大勢そこへ来て汲んでいました。その井戸には死んだ人が浮かんでたこともありましたが、光利さんという井戸とは違います。屋根は立派にコンクリーで造ってありましたが、水が溢れて流れるのでなくて、溜まっている井戸です。今考えて見ると、ちょっといやな感じがします。余裕があれば、死んで浮かんでいる人を取り除けますが、弾が来るのを恐れて早く汲まねばならないから、それで死んだ人が浮いていてもその水を汲んで帰って飲まねばならないんです。水を汲んで帰る時は前にも話したように兵隊に無理に水をくるといつて分けられることが多かったんですが、住民も子供をつれてお母さんなんかは、自分で汲みに行くことができないから、少し下さいといわれて、分けて上げることもありまし

五名は転んでしまったんですよ。直撃弾は、一発落ちたら、四発くらいはいつけて落ちるんですからね、照明弾に照らされた中で。それで四発落ちたら、もう十四名はやられて倒れておるんです。後四、五日くらいして捕虜になるといふ頃であつたから、その時は広っぱにですね、子供や女たちもどつた返しておる、それは避難民なんです。阿檀葉もいっぱい茂っているし、茅の原野も、それから畑なんかも、避難民は、どうせ命は覚悟の上でしょうから、そこに四、五十名、百名も坐っているんですが、照明弾が上って、そこに直撃を受けた場合は、あつという間に四、五十名は転んでおるので

す。避難民は阿檀葉の下は人がいっぱいしているし、広っぱも畑も人がいっぱいしておるんですよ。それが全部せめられてですね、例えば一万坪の畑に一万人の人がいるとした場合に、これを百坪くらいにおし込められてしまっている状態になっているところへ直撃を受けると、一発で何百名という人がやられるわけです。魚が網で囲まれて、一か所に集められているのと同じですよ。

マヤー壕から出た時は、食糧は持てるだけを持って行ったんですが、それがいつまでもありませんから芋を掘りに畑へ出て行くんですね。芋掘りは、壕から、二、三百メートル、四、五百メートル出かけて行きますが、掘って来た芋は生でも食べるし、情報(状況)によって煮て食べる場合もありました。

水汲みは、前に言った上里の井戸へ行くわけですが、マヤー壕から出てからは、三日に一べんくらいは行ってました。各しよたい、五、六名くらいがいっしょに行くんですよ。夕方日が暮れる時

よ。度たびそれはありましたよ、子供をつれたお母さんはどうにもならないんですよ。それで何十回か上げたわけですがね。兵隊の場合はいくらいけばやるぞといった圧迫、脅迫のものが多かったの、くればたいていやになつたですよ。昼は汲めないから弾がしばらく止む時です。夏なら六時半から七時頃までは実に激しく弾を撃つんですよ、その後で、びたっと一時間近く止るんですよ。艦砲はその間、全然止つたんですよ。

水汲みは、あまり弾が激しくて途中から帰ることもあつたんですよ。また弾が激しいので、少しだけ汲んで帰らなければならぬ時もあったんですよ。

捕虜になつたのは、朝から宣伝マイクで、ガソリンをかけて山を焼くから、という宣伝が出たから、すぐ隣の部落も自分の部落も、またほかの避難民も大勢おつたので、わたしはまだ三十一、二の若さでしたから、焼くという宣伝や情報も入っておることだし、みんな恐がっておるので、こうなつては出た方がいいんじゃないかと二、三か所連絡に行つたんですよ。

そうしたら友軍の兵隊が、「これはスパイだ」と友軍の兵隊がきめて、わたしに小銃を向けて、射殺しようとして捕えたんです。その場合に、自分の部落のおじいさんや女の人が、これはわたしの親戚だが、スパイでもないし、もうどうにもならないから、お互に捕虜になろうかと、来ておるんですよ。それは沖繩の方言で言っているの、相手に通じないんです。それで一人は手榴弾、一人は小銃を構えて、もう殺すやつていたんです。わたしは、その方がたと兵隊が話し合いをしておる時に、隙を窺って逃げ出したんです。そ

うでなければやられおったんですよ。

そうしてその晩は、そこで夜を明かしたんですが、翌日の九時頃ですね、ガソリンをかけてこの阿檀林の南がわを焼きはじめたんです。その場合に新屋さんの奥さんが、わたくしから出るからみんな後について来いといってですね、それで新屋さんの奥さんが出られたので、わたしは十四、五名のものが全部出たんです。そうして出はしたものの、われわれから五メートルばかり離れたところに、拳銃を持ったのと、小銃を持ったのと、アメリカの兵隊がわたしらへ構えて立っているわけです。

捕虜になった日は、六月の二十二日でしたが、自分等が兵隊につれられて行く時に見た死人は、道だけでも何百人ではなくて何千人だと思えましたね。米軍の方も負傷しているのは、ジープに乗せて担架で、運搬されて行くのも二、三台見たんですがね。

死人があまりひどいので、踏まないようにと思いながら歩いたのですが、もとも多かつたのは、喜屋武師の望楼ですね。灯台が立っていますが、その東がわの約五メートルくらい行ったところに、喜屋武に向かつて大きな道路がありますが、その道から喜屋武に行ったわけですがね、道路から喜屋武に行く場合には、死んだ人はあんまり見なかったですが、この道路に出るまでの茅の野原、畑、海岸は阿檀林の下で光景ですね。そういうところは、何ともいえないくらいで、足の踏み場がなかったですね。

註、新屋さん発言。仲門忠一君の話のように死んだ人は大変でしたが、友軍がしたのか、アメリカ軍がしたのか、これははきつりしないが、自分の方の前原何とかさん、あの方は病気で阿檀の

憶えていません。うちの人が防衛隊に行っていますので、わたしは度たび慰問に行っただけですよ。お餅などもつくって行ったり、豆腐をつくって持って行ったり、芋なども煮て持って行きました。

また兵隊さんもうちによく来ましたので、食事をあげていました。待つて貰って食事を上げることもありませんが、それは特別だったんですね。自分の夫もひどい思いをしてやっていますだろうと思ひましてね。餅は、こっちは米がそんなにありませんで、うちなんかタピオカを作っておりましたから、その澱粉で餅をつくって持って行きました。

それでうちは怒られたことがありましたよ。兵隊が二人来ましたから、腹を空かしているだろうと思ってですね。あの時は、おじいさんもおばあさんも妹もおりましたから、おじいさんというのは夫のお父さんですよ。それで夕飯時前になっていましたので、ちょっと待つて下さい、といって夕飯を上げようとしていましたので、待つていました。そうしたら炊事班長は伍長でしたが、この伍長さんが来てですね。あなたがたがせつかくの親切だが、民間に兵隊をそんなに入れてはいけないから、今後はそんなことはしてくれないようにといわれたんです。それでその後からは、なるだけ兵隊さんに、伍長さんから話されたように、御飯なんか上げないように気を付けました。

夫は今の糸満町の照屋にいたようですが、あの時は、夫がどこにいますかという事はよくはわかりませんが、夫が防衛隊に出たのは昭和十九年でしたが、四月頃は、わたしが妊娠していることは人がわかりませんでした。主人は、昭和十九年に防衛隊に取られまし

防風林の中に入っていたわけですが、この人は歩けないんだが、海岸はたの岩のところに自分で出られたのか、あるいは、アメリカの兵隊にでも引っ張られて行ったか、これははっきりわからんけれど、この方は酷い殺し方をしてあるのを見受けました。後から拳銃でやったか、あるいは小銃でやったか、あちこち沢山の弾でやってありました。

それから子供や家内たちは山原にですね、石川あたりへ。わしらは那覇で一か月くらい作業やったですね。それで、嘘の病氣をつかって、山原へ行こうと考えたんですが、そうしたら、屋比久(佐敷村)に移動させられてですね、今度は船に乗せるといふんです。それで今度こそはいろいろの手をつかって、太平洋の真中に捨てるそうだが、という噂が出たんですよ。何百名という人が心配しておったんですが、デマであって何でもなくて、それから久志村に収容されて、向こうでまあ相当暮したんです。

山城へ帰る前に名城で暮して、それから山城に帰って六か月くらい暮して、家も作ってあったが、フィリッピン部隊の練習所になって、また立ち退きになったんですよ。伊原にですね、向こうで一、二か年暮してこっちへ戻って来たわけですよ。

仲門 子ヨ (二十三歳) 主婦

夫は最初は徴用で、陣地の構築などにずっと出ていましたが、その時は武部隊だったと思います。

徴用に行っていて、すぐ防衛隊に取られました。何月だったかたが、時どきは家庭訪問が許されて、帰って来ることがありましたから。

マヤー壕から出るどれくらい前でありましたか、二週間くらいしてから、マヤー壕を出たのではなかったですかね。主人が帰って来まして、財布と判子をですね、それをわたしに渡して、今日別れると帰って来られるか帰れないかわからないから、この子を立派に育ててくれといいました。あの時からは山城の人にも、防衛隊から帰って来てそのまま行かないでいる人もいたんですよ。それでわたしは、それを言っていて、行かないでうちにいっしょにいた方がよくないかと言ったんですよ。

そうしたら、「日本という国は、友軍は、お前がいう通りに逃げたら、自分一人だけ死刑にするとは思われないから、それでわれわれ夫婦だけ死刑になってもいいが、家族みんなが死刑になったら、どうするか、その時にお前が責任を引き受けるか」といふんです。そう言われたので、うちもあの時代は子供(若い)ですから、わたしは数えの二十四歳で、夫は二つちがいの数え二十六でした。

それで「わたしはわたしの考え、あなたはあなたの考え、家族全体が死刑になるということなら、その時は家族に泣いて恨まれるかわからないから、あなたはあなたの考えだな」といって、そのまま別れたんです。それは六月の何日頃(初旬か)ですかね。わたしは六月二十四日のカシチー(糯米で御飯を炊く節日)は山原でしたから。それは旧暦の六月二十四日ですから、旧暦でいうと五月だったんですよ。

マヤー壕から出たくはなかったんですが、兵隊が来てですね、こ

つちから出ないと斬るといって、豊なんかも切つてですね、仕方なく出ました。それは部落の人たちみんないっしょに出たんですよ。

マヤー壕を出されたから、そのマヤー壕の下に行つて、ちよと右がわへ出て、海岸に通るんです。海岸へ行く途中に、阿檀の林がありましたので、そこに二日か三日おりました。親戚の六所帯がいっしょになっておりました。みんなで二十二、三名ですね。

阿檀林の中におつた時は、雨が降りましてね、持っていた釜を上置いて、小屋をつくつて入つておりました。御飯は、毎日炊かになつたんですよ。天気がいい時に、水が溜つても食べないわけにはいきませんから、子供にそれをあげたんですよ。水で濡れたというのは、雨垂れからですね、小屋は小さいもんですから、人間は濡れては困るんです。子供を濡らしてはいけませんでしょう。御飯や道具は濡しても仕方がないので、水ベチャベチャの御飯を子供に食べさせたんです。うちはまだあの時は食べられなかつたんです。お腹に子供を持っておるもんですから、欲しくなかつたもんですから、うちは澱粉水に砂糖を入れて飲んでいました。

そこから海岸へ行く時も夜です。下りたらすぐ海岸です。うちなんかがいた阿檀林からそう遠くありません。海岸といつても、やはり阿檀林です。海岸の上に阿檀林があるんです。阿檀林では、雨が降りつづいて、藪ですからしやがんでいたんです。こんなにしてはいられないから、下へ下りて行こうといつてですね、また中スダチというところへ行つたんですよ。

んですよ。そうしたら、あなたがた軍隊の言うことをきかないんなら承知しないよ、というんですね。それでも、こつちも子供たちをつれてはいるもんですから、食糧なんかも取りに行くのですから。それで帰して下さる、といつたんですが、ぜんぜんきいてくれな。あつちで喧嘩したんですけれども、仕方なく戻つて来たんですよ。そうしてしばらくしたら、この二人が帰つて来たんですよ。それで、あなたがた、また兵隊のところへ行くと、みんな今日は、どこへ行くかわからないからね、といつたら、この子たちは兵隊のところへ行かないようになつて、いっしょに炊事などしてくれました。水汲みもしてくれました。

この子たちが来てからは、そう長くはいませんでした。何日といつてはわかりませんが朝の十時頃だったと思うんです。上の方には糸満の人がいましたが、自分たちのところへ来て、捕虜になる方がいいよ、といつたんですよ。それで、今は激しくて出られないんですよ、といつたんですが、まあ出て捕虜になろうと出たんですよ。それで、友軍の兵隊さんが出るなら撃つといつたので戻りました。

そうして壕の中に入っている兵隊でありましたが、あの方たちは、あの時は、軍刀持っている兵隊でありましたが、あの方たちは、ほんとに、いい方たちだったんですよ、ふたりとも。「避難民だけでも命を助かりなさい」といってですね。いいえ恐いから行かない、といつたら、「でも避難民だけでも命は助かった方がいいですよ」といってですね。それで「兵隊さんたちといっしょだったら行くんですが、うちらだけでは友軍の兵隊さんに斬られたら恐いですから」といつたんですよ。そうしたら、「兵隊ともあるものが捕虜に行

あつちで五日くらいいたんですよ。そこも海岸との間の防風林で阿檀林がありました。ここでも阿檀の葉の上に莫莖を敷いておりました。やはり雨が降りますので、ここにもいられないといふことになつて、兄さんたちが壕をさがしに行つたんですよ。そうして、人が大勢いる方へ行くのがいいといつて、海岸へ行きました。

そうしたら、海岸の阿檀林の中に、大きな岩が二つありまして、上はあいていますが、こんなになつていたんですよ（両手の掌をハの字形にして示す）。岩は西と東がわの二か所にありますので、海の方はあいていますが阿檀がありますし、ちよつと離れて、いいあんばいにそこにも岩がありました。

それでも艦砲が来まして阿檀の葉なんか散つて恐かつたので岩の中に入つて蒲団なんか被つておりました。この方の、新屋さんの叔父さんですけれど、暑いからといつて、足をこうして出してそとに出ていたんです。そうしたら、艦砲の大きな破片が、すぐ足のそばの阿檀の幹をたち切つて、そうしておじさんの足も怪我したんですよ。それでもうそれからは、艦砲が激しいので、そとへは出なかつたんですよ。

自分は今二十三になる女の子を持っていたもんですから（妊娠）、水汲みなども行かなかつたんですよ。御飯炊きは行きおつたんですよ。

それから夫の妹とこの仲間さんの妹とですね、飯し炊きに兵隊たちにつれられて行つて帰つて来なかつたんですよ。それで、これをつれて来なければ大変だからというので、陣地の中に連れに行つたんですよ。

くのは国の恥である」といって、手榴弾二つ持っていたんですが、一人はアメリカをやつつけて、一つは自分たちを処理するといつてから、早く出なさい、出なさいといつてこの方たちは行つてしまつたんですよ。

それで捕虜に出て行つたんですが、出で行く途中で、男も女も、子供も年寄りも死んで寝ころがっていたんですよ。こんなになつては大変だと思ひました。捕虜になる二、三日前からは、船からですね、早く出ないと、山は焼き払うからと呼んでいましたが、捕虜になる前の日には、明日は焼き払うから、命の惜しい人は朝の中に出なさいと言っていたので、出たわけなんです。

そうしてアメリカさんははじめて見たので恐かつたんですよ、あの時は。子供たちは、あれは何か、あんな人見たことない、といつて恐がりました。

アメリカは港川へつれて行くといふことでありましたが敗残部隊を恐れて、港川にはつれて行かないですね、海岸に下して、また海岸の険しい崖を上つたんですよ。女は先きになつて、男たちがお尻を押し上げて登つたんですよ。阿檀林の上に行つたら拳銃持ったアメリカさんが男たちを押すんですよ。押して歩け歩けといふんですよ。

それから百メートルくらい歩いたらですね、またこつちで休憩させるんですよ。そうして動いたらやる準備ですよ、アメリカさんは。それでお爺さんたちは、「一か所帯つづつひとところに早く集りなさい、もう今日がおしまいだから、あなたがたは、わたしたちが生まなかつたら、こんな目にあわさなかつたが、もう仕方がないか

ら、運命と思って諦めなさい」といって泣くんですよ。

自分も子供が一人いましたが、夫は兵隊に行っていないし、子供を見てですね、自分が生まなかったら、こんな哀にはあわさなかったんだけど、と子供を抱きしめて泣いたんです。

また歩きなさいというので、歩いたら喜屋武の方へ行っただけですよ。喜屋武へ行ったら、親たちは亡くなって、みなし児になった子供を二人つれて来よったんです。そうして、若い人たちに、あなた方つれて歩きなさいといって預けるんです。この子供たちはどこへ連れられて行ったか知らないが、こちらは喜屋武からつれられて、小波蔵で水を飲まされて伊良波というところへ行っただけです。伊良波では、二晩とまりましてそれから久志小（北部）へ行っていました。そこでは生活が困難で、六か所帯がいつしよに宜野座の方へ夜逃げて移りました。

註、仲門チヨさんは、妊娠中の体で、米軍の掃蕩砲撃のことも激しかった時期の南部地区を、生命を全うする一心で逃げ廻った。雨に打たれ、熱病に冒されたりして捕虜になって北部へ送られた。

宜野座村の米軍の簡易病院でお産し、女兒を得た。

夫から養育方を頼まれた当時三歳だった長男は無事成長して現在琉球政府の公務員である。戦争中お腹の中にいた女兒もすでに結婚し、共に那覇市に在住の由。

子供の養育を頼み印鑑と財布を渡して行った夫は、その時が最後の別れでついに帰っては来なかった。どこでいつどんなにして戦死したか、全然わからないとのこと。二十三歳以来戦争未亡人

生活をつづけているチヨさんは、緑の山城南面の丘をすぐ前にするお住いで、八十一歳の姑と二人暮らしのようである。春先きの山鶯がしきりに鳴くのがきわ立って聞こえる静かな好ましいたたずまいの環境であった。

仲門 光利（十六歳）

わたくしは小学校の高等科を卒業しましたら、大嶺飛行場（旧小嶺村大嶺）の建設に徴用されました。今の那覇の飛行場ですよ。体は小さいし、馬車もひいていますからなあ、大変に苦しかったですよ。毎日泣いたですよ。今の小学校の六年生くらいの体しか、わたしなんかなかったんです。朝に行くとき夜明通しの作業でしょう。また今朝ここを出発すれば、明日の朝にあっちにつくという、こういうぐあいだったんです。一週間くらいあっちに泊って作業させられた、交代で。そうして一週間するとまた行くというように、重労働でありました。

食事は、向こうでやはり食べるわけですが、こっちで供出した芋などですが、これを煮て食べるが、水が出るようなのを食べさせて作業をやっていたんですよ。一回だけは御飯を食べさせたことがありません。

この徴用は長かったんです。ずっと十・十空襲が来るまでつづいていました。その後は、武部隊の兵隊が来ておったんですから、武部隊の兵隊に引き取られてですよ。食糧の運搬や防空壕の材料運搬をさせられました。

わたしの家は、お父さんが防衛隊で、兄さん二人が兵隊に召集されましたので、わたしが家の責任を持たねばならなかったんですよ。わたくしの家は瓦葺きで、三十三坪くらいありましたね。それで防空壕から晩御飯炊きに来たんですよ、家に。そうしたら、防衛隊が鶴嘴を持って家を壊しているんですよ。そうして兵隊が来てから、戦争に勝てば、これ以上の家を造ってあげるんだよ、と聞いて壊させおったんですよ。戦争に勝てばこれ以上の家をつくってくれると思って、いうことは、別に悪いとは思いませんでした。壊されても当り前のように思いましたよ。そうして借借証もくれましたから。

うちなんか十・十空襲の後からは、晩の五時から集まって、ですよ、那覇の駅まで行って、夜材木を積んで来たんです。これは強制的だったんですよ。また晩の五時頃から出て、恩納の山田までも夜どうし歩いて、あっちからまた荷物を積んで帰って来たりですな。また越来飛行場（現在の嘉手納飛行場）から、いろんな地雷なんか、あんなものを、こっちへ積んで来たんですがなあ。今日は空襲がないという日は朝早くから夜まで、馬車も馬もずっとぶっ通しに使うわけです。

空襲の時には壕にいて、連絡があると行くのですが、壕はマヤー壕^アといって、部落中の人が入れる大きな壕で、三百人以上の人が入ることができるんですよ。馬はヤキアブという壕に入れてあったんですよ。

山部隊といっしょに行く時、こちらはあの時まだ年が若いから、数え十八歳からは義勇隊に行っていたんですよ。わたしはまだ数

え十七であったから義勇隊には出なかったが、同じ年の人が馬仕事に行っておったんですよ。その人なんか強制的に首里に馬車持って行ったですよ。うちの馬はまた別の人が持って行ったんですよ。うちにそういう話をしておったんですよ。うちは父が防衛隊でしょう。兄さん二人が兵隊に行っておったでしょう。それでうちが、子供何名ですか、五名、弟妹と母が、それだけおったんですから、わたしは、弟や妹が多いからということで、あっちへ行くことは免かされたわけです。それでわたしは、うちにいたんですが、首里へ行った人たちには、亡くなった人も沢山いるんですよ。

石部隊が来てからは、住民の行動は、自由にはできなくなりました。住民は全部マヤー壕に入っていますから、何戸ずつといって班をつくってですよ。それで班長をきめて、男何名、女何名といって、水汲み作業、飯炊き作業、野菜取り作業といって、やっておったんですよ。

昼は出られないので、夜行動するんですが、出るには証明書がいるんです。出入口には、衛兵がいました。そういうふうに住民は自由に行動するわけにはいかなかったんですよ。

今マヤー壕を兵隊に追い出されたお話がありました。マヤー壕にいた時でも、うちなんか小さい子供がいたんですよ。子供が泣いたらみんなが、いやがるわけですよ。それで自分としては、何とか出て行きたいという気持ちだったんですよ。

うちなんかは、皆兵隊へ行っておらないですから、そのマヤー壕の時、みんな順番をつくって、銃剣術の棒を持って交代をして巡回をしておったんですよ。夜は。

出るということになった時は、仕方がないから、出たんですが、わたしたちは、あつちから朝の九時頃に出ておるんですな、マヤー壕からは。そうして頼る方もないし、自分の知っている機関銃陣地があつたんですよ。それで親戚のおじさんと共に、さああの陣地を見て来ようといつて見に行つたんですよ。そうしたらちようど海へ向かっているんですよ。海からすぐ見えるところになつていたので、それでこつちでは駄目だということ、ただ歩いておつたんですよ山の中から。そうしたら大きい石があつたんです。それでわたしはそのそばに顔をくっつけて覗いて見たんですよ。そうしたら、何だか風が来るような気持ちがあつたんです。それで、よしや、この石ひとつ転がして見ようと思つて、坂だったから二人で転がしたんです。そうしてそこを掘つたんです。九時半頃から十二時半頃まで掘つたでしょう。下にボツンと穴があいたんです。そうして三時頃まで掘りつづけたら、ようやく足から次第次第に入ることが出来るようになったんです。そうして入つて行つたら、大きな壕ですな。水も沢山あるんですよ。

家族たちは、防風林の中に避難してましたので、自分は、家族をつれに行きましたが、その時はもう五時頃になってました。その壕は、入ることは百名も入るんです。その壕は、傾斜になつて、下には水もあつたんです。そこに親戚たちが五十人くらい入ることにしました。どうして聞いたか、みんながやつて来ておつたんですよ。

そうしたらマヤー壕にいた石部隊から、機関銃部隊といつて六、七名くらい、機関銃をうちの壕のそばに置いて二、三回ドンドンないます。澱粉です。澱粉を水に溶かして、これを飲んでおつたんです。それでも少しづつ持っている米を出してこの兵隊にやつたんです。

その翌日ですよ。子供がいたらまたこつちも爆雷かけられるからといつて、「三歳以下は、こつちで処理する」といふてですよ、三歳以下は五名いたんですよ。曹長がいたんですよ。それといつしよに四名来ているんです。注射やつたんです。その前に、兵隊が、ちよつと、頭が変なのがいるでしょう、そんなのをつかまえて、全部よくやるのを見たんですよ。やつぱり注射してから一時間くらいですよ。

この五名の中には、わたくしの弟と、姪も入っています。この五名を殺すというので、わたしたちは、この壕から出ようと相談したんですよ、隊長に。そうしたら、君たちがスパイやるからといつて、門衛を立てて、もう一步も動かさないわけですよ。そうして五、六名来て、一人ひとりつかまえて注射したんですよ。うちらは、どうにかして、弟や姪を助けようと思つて、この壕を出るからと、お願いしたのですが、スパイされて、アメリカに自分等を知らすといふことで、出口に門衛を置いて鉄砲を構えて、動かさないよりにしたので、もう仕方がなかつたんですよ。

その時からは、兵隊がいつばいなくて動くこともできないくらいに入つて、おりまして、民間としては、奥にいつばい入つておりましたからね。

その翌日の朝ですよ。住民が生きているのは君たちただだから、アメリカに捕えられて戦車に轢かれるよりは、われわれが処分して

撃つたんです。撃つたら、わたしたちの壕に入れるという考えだつたと思うんです。そうして、自分たちを、そこへ入れてくれといつて来たんです。それくらいの人数なら止むを得ないだろうと、入れることにしたんです。

そうして、機関銃を二、三発撃つては入り込むんです。多分、マヤー壕よりはこつちが安全だということで、逃げて来たんだと思つたんです。

註、ここで同席のみなさんが「ほんとのことだから言なさい」と口ぐちに言つた。何か余程かわつた事実があることを暗示した。

その後兵隊たちがまた十五名くらい入つて来ました。この兵隊たちとは、二週間くらい暮してましたんですよ。水もあつて洗濯やつても流れて行くと、この兵隊さんたちは喜んでましたんですよ。いいあんばいだったんですよ。そうしていると、マヤー壕といふところが、それから一週間くらいしたら爆雷かけられたんですよ。アメリカ兵が発見されてですよ。そうしたら残つていた隊長なんか、六、七十名くらいだったですよ。すぐ晩なつたらうちの壕に引つ越して来たんですよ。中尉がおつたんですが、そうしたら、うちらは子供がいたから一番奥ですよ、壕も上等で、そこは二重で、あの鐘乳石が生えて（垂れてか）あつたんですよ。その後子供なんか置いてあつたんですよ。こつちが一番上等だからこつちにおれといつて、いさせたんですよ、うちらは。

そうしたら隊長が言うわけですよ。あつちから来た隊長が、君たち飯はないかといふんです。うちらもその時から飯もあんまり食べ

やろうといふんです。そういわれたので、わたし等は黙つてました。それは、住民を処分して、残りの食糧を澱粉なんかあつたら自分なんか取る考えだつたんですよ。八時頃、その話が出て来たもたしている中にですよ。ちよつといい場合に、アメリカがこの壕を発見してしまつてですよ。爆雷、こつちの壕に投げ込んだんですよ。その時兵隊は入口にいたのですから、五、六十人はやられたでしょう、一日中爆雷はかけられ通してました。それでちよつと顔を出して覗いたら小さな入り口が大きくなつてましたよ。隊長は奥にいたので、さしつかえなかつたんですよ。

それで晩になってから民間がこつちには大変だとみんな相談して、この壕から出たんですが、あの時から出ても、文句はなかつたんですよ。もうこつちが発見されているので、うちらが出たから発見されるということはないとわかつていたからでしょう。

爆雷が投げられなければ、やられたんですよ。隊長と住民とはすぐ近くで、こつちへ集まれといふことですよ。話を聞いたら、「住民が生きているのは君たちだから、君たちはこつちが処分してやるから何も心配しないでよ」といふことになつていたんですよ。それが爆雷かけられたからもう生きることができたわけですよ。

住民で亡なつたのはうちのお婆さんだけですよ。焼じた方は可なりいたでしょう。兵隊は住民をちよつとでも動かさなかつたんですよ。小便も坐つているところでもやらないといけなかつたんですよ。

隊長は中尉でしたが、小尉もいました。注射したのは曹長だったんですよ。この隊長が今も生きているのか、それはわかりません。

隊長たちは爆雷を一日中アメリカにかけられても、奥の一番安全なところにいましたから、何でもなかったんですよ。

住民としては爆雷かけられた方がよかったんですよ。九時頃からはじまって、住民を処分する話が八時半頃から出ておっただんすから、もたもたしている中に爆雷をかけられたんですから。五十人くらいですわね、住民は。

兵隊が言うように住民はいないとしかりちは考えていなかったんですよ。弟がいますが、あの時五つになるのが、それをつれてうちは出たんです。母なんかも、すぐ出て来なさいと言ったが、何か集めるといって、ひとところにかたまつて、また親戚の人たちもひとところに集まって出ないんですよ。兵隊が沢山死んでいるから先きになつてくれ、というんです。若い親戚の女の人もいたが、靴がなからさがして来るといっているので、靴は歩きながらさがされるから早く出て来いといったが出ないんですよ。それでうちらはそのまま行った。母なんかとは、いっしょに出なかつたんですよ。五つになる弟と、また親戚の人などとわたしは先きに出たんですよ。そうして阿檀のところへ行つたが、母なんかが見えなかつたので、ちょっとこれを見ておつてくれと弟を頼んで、西がわに向かって駆け足でわたしは行つたんです。そうしたら、叔父さんとうちの母がいっしょに歩いて来るのに出あつたんですよ。そうしてからいっしょに阿檀のところへ来て、それから捕虜になりました。捕虜になつたのは六月の二十八日ですよ。壕を出てから、七、八日、長くて十日くらいで捕虜取られたよなあ。

あの壕にいた時は、水もおいしかったですよ、阿檀のところ

はわからないんですが、こっちは何もわからないといつてでしょうな。「切り込みに行くんだから、食糧をよこせ」と拳銃で脅しましたよ。まあ、無理矢理に食糧を奪って行きおっただんす。自分だけ生きて、本土へ帰って行くこうという考えだつたと感じましたね。

行つたら、もう水も臭くて、とても飲める水ではなかつたんですよ。あとから話聞いたら、井戸に死んだ人が落ちていて、水汲みに先きに来た人がそれを出して、水を汲んで行って、また死人が井戸に落ちていたら、出して、それが腐れていたりして、そんな水を飲んでいたらいいですよ。もううちがあっち行つたら、その水は全然飲まれなかつたんですよ。飲む時は、鼻をつまんで飲むんですが、鼻から手をはなすと臭いといつたあんなばいだったんですよ。しかしこんな水を飲んでもぜんぜん腹もこわさなかつたんですよ。

あの壕での友軍の兵隊のやつたことは、あの時のことは、今は考えたくありませんが、兵隊はわたしたちの食糧も、これから切り込みに行く、戦争は兵隊がやるといつて取りまして食べていました。うちらは、子供等には二、三日前に炊いてあつた糸の引くお握りをくれて、おとなたちは何も食べないで見ているだけでしたよ。食糧をくれという時は、「今から切り込みに行くが、何も食べないから、何かくれ」というんですよ。

註、仲門忠一さん発言。もつとひどいやり方があつたですよ。布呂敷包みに米があるのをですよ。瘦せ死にする（栄養失調で死ぬ寸前の意）くらの立場にあるのだが、最後の米だといつて持っている布呂敷包みの米を見てですね、あれをくれ、くれないなら手榴弾でやるぞ、といつて脅かすので、やらなければならなかつたんですよ。

新屋守一さん発言。わたしは防衛隊にすつといつて、首里から帰つて捕虜なるまで、長くはいっしょにおられなかつたが、やはりそんなことがありましたよ。どこの部隊といつてはあの時から